

気持ちを伝えあいたい

私は、言葉によるコミュニケーションを当たり前とってきたが、そうではなかったとこの授業で学んだ。言葉がないことは時に人々に間違っただけの印象を与えているのではないかと思った。このコラムで、感情を伝えあうことの難しさについて考えたことを述べたい。

感情を伝えるのは言葉だけではない

私たちは、そっくりそのまま、その人の気持ちや立場を体験してみようということにはできない。自分の近くにいる人でも、そうでない人でも、自分以外の人の気持ちなんて正確にはわからない。

だから、私は、共通のサインを使って、感情をやりとりしている。例えば、言葉、声色、表情、身振りなどだ。楽しいとき、笑顔を見せるし、悲しいときには悲しそうに話す。やめてほしいければ「やめて」と言うし、嬉しければ「ありがとう」と言う。私は頭の中で、そのサインを変換して、相手の気持ちを推測する。それで人の気持ちが少しはわかるし、自分と同じような感情を持っているとわかるから、自分と同じ人間なんだと認識している。

私は、国語科の教師を目指していて、言葉は人と人をつなぐものだと思ってきた。言葉は、世界との窓口、世界を見る目だと思っていた。言葉によって考えていて、言葉が思考そのもののようにも思っていた。しかし、重複児教育総論の授業を受けて、その自分の価値観に恐ろしさを感じる瞬間があった。

きっかけは、動画「山の、上で～ある重度知的障害者施設の日々～」の人々だった。重度知的障害者の人々は言葉によって何かをやりとりするわけではなく、つまり、私と共通のサインを持っていない。私は、気持ちを推測できないし、自分の気持ちもうまく伝えられないだろうと思った。動画を見ながら、何を今思っているんだろうか、と真剣に考えた。そして、言葉を介してコミュニケーションしない人は一体どのように世界を見ているのだろうと思った。

大学生になって、駅のトイレで、周囲の人とは異なる行動をとっている人を見かけたことがあった。トイレの個室でトイレットペーパーを回したり、立ち上がったまま動かなくなったりといった様子で、周囲の人は困惑顔だった。私よりも前からトイレにいた人は、他の人と、怪訝な表情で、「何をしているのか」と言い合っていた。私もその時は、ただ驚いて、誰かその人をわかっている人が一緒にいると安心できるように、と思っただけだった。

しばらくして、授業で様々な動画を見たり、学んだりして、このことを思い返した。私を含め周囲の人は、その人のことをまるで感情がない人かのように、心のどこかで思っていたのではないかと思った。「きっと、この人は私たちの言葉や、表情をわからないだろう」という前提のもとに、その場にいた人はふるまっていたのだと思う。その人はその人で、自分の衝動にコントロールがきかなかったり、周囲の視線を嫌だと思ったり、言葉や表情に出ていない感情があったのだろうと今は思う。

その人の感情がわからないことは、その人に感情がないことではない。そんな当たり前のことにはとさせられた。

重度自閉症当事者で、作家の東田直樹さんは、「自閉症と僕を切り離して考えることはできません。僕が自閉症でなければきっと今の僕ではなくなるからです。僕たちはかわいそうだとか気の毒だと思われたいわけではありません。ただみんなと一緒に生きていきたいのです。みんなの未来と僕たちの未来がどうか同じ場所にありますように。」と映像「自閉症の君が教えてくれたこと」の中で伝えられていた。私は、東田直樹さんを通して、私と同じコミュニケーションの方法をとらない人でも、豊かな感情があって、自分自身や周りの人、社会、命を見つめて生きているのだということを知った。

東田さんには、人に気持ちを伝える手段があったから、私たちは気持ちを共有することができる。山の上の施設で暮らす人々に、そうした手段があったなら、彼らは何を語ったのだろうか。私は、その人の気持ちを尊重する、ということの難しさに驚いた。

教育にできること

私は、教育の立場から、重度・重複障害児者の感情の共有や、意思表示、生き方の選択について何ができるだろうと考えた。

その一つは、共通のサインを使えるようにすることだと考えた。授業で学んだ中で、指のサインや、手のひらに書くサイン、体の特定の場所に触れるサイン、五十音の表を使ったサイン、東田さんのキーボードなど、感情を示すものは、言葉、発話だけではないことを知った。

こうしたコミュニケーションが教育によって実現され、その人がしたい生き方に近づいていけるという営みは、教育の本質的な部分だと思う。

コミュニケーションに関する指導研究を調べてみると、サインなど決まった型を共有して、コミュニケーションをとるだけでなく、その子どもの感情の表出自体を促すというものがあった。鈴木朋子（2020）の指導実践は、教師のはたらきかけ、子どもの応答、教師の応答を繰り返すことで、相互作用が生まれ、感情の表出が促進されるというものだった。音楽が好きな生徒 A に CD のラジカセのボタンを押してもらい、音楽が流れ手遊びをする。そして、教師が手の動きを誉める。また、自己決定をする場を増やし、「もう一回しますか」と尋ねて、どちらの手でボタンを押すかも教師が尋ねる。生徒は反射で左手で押す。教師は「左手ですね」とコミュニケーションとして反応を返していく。最初の段階ではボタンを押すのは反射的だったが、徐々に教師の手を握って、意図的な応答に変わっていく。最初は反射だったものに対して、教師が働きかけていくことで、相互作用が成立していくのだとわかった。こうした関りをおして、明るい表情が増えたのはもちろん、私が驚いたのは、険しい表情やはぎしりも増えたことだった。双方向のコミュニケーションが成立すると、自分の感情を表出しやすくなるのだとわかった。したいことを伝えられることだけでなく、したくないこと、嫌なことを意思表示できることもとても大切なことだと思う。

そして、もう一つ私が大切だと感じたのは、障害がある人と関わったことの少ない子どもたちへのアプローチだ。私は、自分とは異なるコミュニケーションをとる人のことを大学で勉強するまでほとんど知らなかった。だから、感情を伝えあう難しさを今になって気付かされた。自分と似ている人と一緒に育ち、そうでない人と関わる機会を持たなかったために、へだたりが大きくなってしまったのかもしれないと思う。自分とはちがうサインを持つ人にも、私たちと同じ感情があるよ、と言いたい。それをあたりまえのように子どもたちに思ってもらいたいと思った。誰かに教わる、「道徳」の授業で習う、のではなくて、実際にお互いにふれあう中で感じられるものがあると思う。教師になって、開けた教室を作りたいと思う。

参考

教育実践研究 第30集(2020) 205-210 *新潟県立はまぐみ特別支援学校

鈴木 朋子

障害の重い子供に対するコミュニケーション行動形成の指導実践 -キャリア発達を促す視点から-

映像 「山の、上で～ある重度知的障害者施設の日々～」

「自閉症の君が教えてくれたこと」